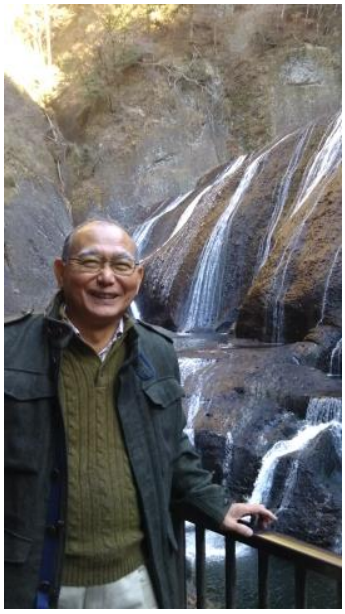
第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

会長ご挨拶



佐倉三田会会員の方々、ご家族の皆様にはますますご健勝の事とお喜び申し上げます。

佐倉三田会も今年で創立 19 周年を迎えることが出来ました。これも会員皆様の相互協力、親睦の絆が実を結んでいる結果だと思っています。

来年度は 20 周年という節目の年となります。佐倉三田会として企画委員会を設置していろいろなプランで盛り上げようと努力しています。先輩諸氏のお話、新しく入会した会員の方々の意見を取り入れて、会員全員が参加できるようにしたいと思っています。皆さんのご協力をお願いします。

また、20 周年を記念して、我が慶應義塾に対して、若かった我々が大いに学び、遊び、そして、友を得た感謝の念を表したいと思っています。その感謝の念として寄付金（奨学金）を募ることにしました。皆様方の是非共のご協力をお願いする次第です。（詳細は別途ご連絡します）

今年から年号が平成から令和に変わりました。陛下が御在命中に退位なさるという今までにない変化です。平成天皇がお若いころに帝王学をご進講した方が小泉元塾長です。小泉元塾長はご存知のように 40 代で塾長に就任され、戦後は皇室から頼まれて皇太子教育を担って、平成天皇にご進講しました。将来の君主である皇太子に国民の精神的支柱として道徳的背骨（モラルバックボーン）を説いた方です。今年の総会の演題はこうした平成天皇が皇太子時代の家庭教師であった小泉信三に関する講演を企画しました。戦後、荒廃した時期、皇太子への教育方法、エピソード等が聴けるのではないかと思っています。

三田会活動は親睦（各愛好会）、啓蒙活動が根幹です。その中の啓蒙活動は各種の講演があります。総会時の講演、アトラクション、稲門会との共催による講演会、サロンがあります。この中のサロンでは他の三田会には無いユニークな企画です。演者は佐倉三田会の会員の方にお願いしています。ご承知のように我が会員にはいろいろな経験、体験をお持ちの方が大勢いられます。その方にご自身の経験等をお話してもらうというユニークな企画です。

佐倉三田会もこうした啓蒙活動、愛好会活動を通して、会員相互の絆を強めていきたいと願っています。

（S45 経）会長　今井正弘

第 19 回　佐倉三田会総会のご案内

平成から令和に変わり新しい時代を迎える事ができ、いよいよ来年はオリンピックが東京で開催され同時に我々佐倉三田会は設立２０周年を迎えます。

日頃の活動を通し懇親的な雰囲気で益々発展したいと思っています。

第１９回総会では楽しい懇親会を企画して皆様のご参加を心からお待ち致します。

第 19 回佐倉三田会総会・講演会・懇親会

➢日時:令和元年７月６日（土）16:00～20:30

➢会場：ウィシュトンホテル　ユーカリ
　京成線ユーカリが丘駅隣接 043-489-6111

➢総会：　16:00～16:40

➢講演会：　16:50～18:00
　講師：都倉武之氏（慶應義塾大学准教授）
　演題：「小泉信三と福澤諭吉」

➢懇親会:　18:15～20:30

➢アトラクション
　落語　にこにこ亭痛風（江口和典氏　S48 政）

➢参加費：　7,000 円

➢年会費：　3,000 円

（塾員のみ、ご家族の方は不要）

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

講演会講師　都倉武之氏　プロフィール
慶応義塾福澤研究センター准教授
昭和 54(1972)年生まれ
平成 8(2004)年慶應義塾大学法学部政治学科卒
共編著に『福澤諭吉の思想と近代化構想』、
『アルバム　小泉信三』、『近代日本と福澤諭吉』

平成３０年度佐倉三田会活動報告

☆　第 18 回佐倉三田会総会・講演会・懇親会
平成 30 年７月７日（土）16 時～20 時 30 分
ウィシュトンホテル　ユーカリにて開催

第一部（総会）
第一号議案　平成２９年度活動報告
第二号議案　平成２９年度会計報告及び監査報告
第三号議案　平成 30 年度活動計画
第四号議案　平成 30 年度会計予算案
第一号議案から第四号議案まで滞りなく承認された。

第二部（講演会）
講師：高橋郁夫氏（慶應義塾大学教授・常任理事）
演題：『消費者心理とマーケティング』少年期から高校までの野球経験のエピソードを話され演題の専門分野では消費のメカニズムや消費者心理などを説明されマーケティングの重要性を認識できた。

第三部（懇親会）
アトラクションでは慶應義塾大学落語研究部の若き２名を招き、溌剌とした落語を堪能できた。

その後の懇親会は盛大に行われ、久々に野球部が優勝し『丘の上』を皆で合唱した。
出席人数は来賓者を含め総勢 77 名

☆　第１１回佐倉三田会ファミリーパーティー
平成 30 年 12 月 16 日（日）17 時 30 分～20 時 30 分ウィシュトンホテルで開催、出席人数は会員、ご家族総勢 52 名
アトラクションとして会員の根岸英昭氏と友人の田沼正次氏のギターとウインドシンセサイザー演奏で名曲を楽しめた。

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年6月発行

カラオケ大会ではこの５月５日に天国に旅立たれた鈴木司朗さんの『乾杯』に皆が加わり盛り上がった。鈴木司朗さんは三田会便り第１号から 16 号まで編集に携わり、長年に亘る佐倉三田会への貢献に心から感謝します。

☆　幹事会開催
　毎月一回開催（７月と１２月は休会）

✧　近隣三田会との交流
　近隣三田会の総会出席、各愛好会の交流が更に深まった。

✧　佐倉稲門会との交流
　講演会やゴルフ対抗戦などで懇親を深める事ができた。

✧　各愛好会・サロン・史跡散策会報告

ゴルフ愛好会

ゴルフ愛好会は、ゴルフを通じ会員の健康と親睦を図ることを目的に 2001 年（H13 年）９月に結成、同月に第１回ゴルフ大会を習志野ＣＣにて開催致しました。その後、近隣の八千代・四街道三田会、それに佐倉稲門会との親睦・対抗戦が新たに加わり、友好、親善の輪を広げています。年間行事としては、定例ゴルフ大会、Open Fun Golf 大会、それに近隣三田会との親睦・対抗戦を開催しています。東日本大震災、2011 年・春の八千代三田会との親睦対抗戦は急遽中止致しましたが、それ以外は予定通りに年間６回の行事を消化しています。

2010 年９月７日（火）には「佐倉三田会創立・10 周年記念」の拡大 Open　Fun　Golf 大会を泉 CC にて開催し、愛好会メンバー、そのご家族、塾員のご友人、総勢 96 名（男性 86 名、女性 10 名）の多数にご参加頂き、お陰で盛大な記念大会を実施、成功裏に終了することが出来ました。これも偏に塾員皆様の強い絆の賜物と感謝している次第です。

現在愛好会の会員数は約４０名となっております。新メンバーのご参加をお待ちしています。

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

平成 31 年（2019）の行事予定は下記の通りです。

４月５日（金） 第 16 回八千代親睦対抗戦　泉 CC　終了　対戦成績　佐倉３勝 10 敗

４月 18 日（木） 四街道三田会　親睦コンペ　アコーディア四街道 GC　終了　６名参加

５月 27 日（月） 第 38 定例競技　総武　印旛コース　8：30 分 in・out スタート　６組

７月　１日（月） 第 32 回 Open　Fun　佐倉 CC　8:10 分　イン・アウト　各３組スタート

10 月 18 日（金） 第 39 回定例競技　泉ＣＣ 9:00 分　５組予約済み

11 月初旬　第８回　佐倉稲門会親睦ゴルフ　佐倉 C.C.　予定　今回幹事は佐倉稲門会

12 月９日（月） 第 33 回　Open Fun　その後忘年会　佐倉ＣＣ各４組　及び　忘年会

定例ゴルフは、全員ハンディキャップ（HDCP）の下で順位を競う公式競技。一方、Open Fun Golf はダブルペリア方式でのプレーとし“Enjoy Golf”をモットーとした大会です。女性の方々にも是非ご参加頂きたいと思います。奮ってご参加の程お願い致します。

HDCP につきましては、2013 年 3 月に従来のハンディキャップを新 HDCP に見直し、第 26 回定例ゴルフ大会より定例ゴルフ大会は新 HDCP 適用でのプレーとなっております。

平成 31 年度の役員は、会長：橋本政彦（法 41 年）、副会長：杉浦爾士郎（商 43 年）、今井正弘（経 45 年）、幹事：加藤準（工 49 年）の４名で担当予定です。尚、下山博・前会長には名誉会長にご就任願いました。　愛好会に参加ご希望の方は；

橋本政彦：ＴＥＬ＆ＦＡＸ　043-461-6303、Ｅメール　fwijj4695@mb.infoweb.ne.jp

にご遠慮なく連絡願います。

メンバー各位の憩い、交流の場として益々発展出来ますよう一層の努力を致したいと考えておりますので宜しくご支援、ご協力をお願い致します。

（S41 法）　会長　橋本　政彦

囲碁愛好会活動報告

囲碁愛好会の活動の中心を担っているのは、有馬広氏（各種計画、段取り）、山本　勲氏（会場設定）、柳原　実氏（会計）の三名の尽力によるものであることを、先ず申し上げておきます。そして、年間の活動については毎年大差ありませんので佐倉三田会だより「第 16 号」を参照してください。とは言っても、お手元に第 16 号がある人もほとんどいないでしょうから、簡単にご説明申し上げると、現在の会員 22 名で、活動は、①毎月の例会（京成佐倉のミレセンにて土曜日）、②大会を年２回（１０月と１月）、③合宿を１回（５月）の３つです。その他、千葉囲碁三田会という組織（会長：山下功氏）があり、季節の良い時に集まって碁会を実施しています。対外試合としては、例にもれず、稲門会との親睦試合も、佐倉市、千葉県などの範囲で行われてきました。本年もおおむね、これに沿った方向で活動を続けてまいります。

囲碁は局地戦から全面戦と種々の戦い方があり、碁石を置ける地点は一局で大雑把に言って、361！

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

（361 の階乗）もあるゲームです。是非皆さん囲碁愛好会に入って碁の素晴らしさに触れてみましょう。

ところで囲碁の最近の話題と言えば、仲邑菫ちゃんともう一つは AI でしょうか。菫ちゃんは小学校５年生で、プロ棋士としてデビューし日本の碁界に希望をもたらす逸材となっております。菫ちゃんがどのくらい強いかという事は皆さんも興味あろうかと思いますので、大まかなところで、入段前の棋力は大学囲碁部の主将クラスと思えば当たらずとも遠からずというところでしょう。

もう一つは、AI（artificial intelligence）の棋力向上が素晴らしく数年前までは、人間に勝つには何年もかかると言われていましたが、コンピュータの発達により人間に追いつきプロでも負けるようになったのはつい最近ですが、これは、コンピュータは速い、疲れない、忘れない、の３つの特徴が強みですが、実はもう一つの強みがあります。それは、恐怖心が無いことです。人間は自分の着手に不安があるので、つい安全な方を選択してしまいそのため最善手を打てず、負けてしまう事が多々あります。人間の対局をベースとした AI ではその代り、突拍子もない手はコンピュータには打てません。それに加え、コンピュータには学習しなかった事に遭遇すると発狂（異常な手を打つこと）が見られました。

ところが、２年位前からプロより強いといわれる「アルファーゼロ」は先生がいなく、碁のルールだけ教えて、超高速コンピュータで自己対局を繰り返し、約５００万回位の対局で実力をつけ、中国のプロを負かすだけの力量になったと言われています。と言っても５００万回がどの程度か分からないでしょうから、簡単に言えば、人間は３０，０００日生きると仮定して一日当たり１６６回対局する量に相当します。これは、打った事を記憶し、疲れないコンピュータだからできる事でまさに人間業ではありません。従って、人間は人間同士で対局すべきでコンピュータとは友達付き合い程度にするのが良いでしょう。

（S４２工）　東海林忠生

麻雀愛好会

平成 31 年より、前任の柴田さん（30 経）より会長職を引き継ぎました石田征四郎でございます。　先ずは、なんといっても愛好会をこれほどまで盛り上げていただいた功績に多大なる感謝を申し上げるところです。

現在会員は佐倉三田会を中心にゲストとして四街道、八千代、船橋から多くの方が駆けつけてくださり約 40 名にもなります。毎月１回第４土曜日に例会を行い、だいたい４卓、1，5，９月は大会として５卓にもなります。各回とも楽しみな賞品があり、特に大会では北海道釧路より直送のタラバガニ、鮭、いくら等の豪華賞品が参加者を喜ばせています。このほかにもプライベート麻雀として月２回ほど２卓を囲んでいます。

兎に角お好きな方ばかりで三田、日吉でよほど修行を積んでこられたのでしょう、激動の時代を乗り越えられた現在、いささかも衰えることなく、その華麗な手作りは皆見るべき人ばかりです。これなら認知症とやらもどこ吹く風、元気いっぱいそのヴァイタリティは年齢を感じさせません。これからも１年でも長く続くことを祈ります。

今年度の役員は会長　石田征四郎（４０政）、副会長　天野一良（４８文）、幹事長田中英二（４７工）、会計幹事柳原実（４８工）、相談役柴田実（３０経）以上５名の体制で運営してまいります。

どうか俺もやってみようとお考えの方ご遠慮なくもよりの三田会役員、麻雀愛好会のメンバーに声掛けください。　“今です”

（S４０政）　石田征四郎

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年6月発行

カラオケ愛好会

平成最後の忘年会兼カラオケ愛好会の例会を、昨年の 12 月 29 日にシルクにて行いました。当初の予想を裏切り、会始まって以来の 20 名の会員の方が参加希望され、結果的には金沢在住の方が風邪で、また千葉市にお住いの方が急用のため急遽欠席されましたが、最終的に 18 名の参加となりました。
今回は【平成最後の忘年会】というネーミングが功を奏したのか、遠くは水戸市や志木市からも参加されました。大先輩の方々が自慢ののどを披露されると、会員はその声量に圧倒され、時間を忘れるほどでした。当会の会計担当の寺尾さんが熱心に勧誘された**結果**、登録会員数は 30 名近くになりました。20 名近くの会員の方が集まると、広いシルク（市役所の下）の店内も熱気に溢れ、大いに盛り上がり、全員の合唱で無事終了しました。

なお、当会は２カ月に１回、偶数月に開催し、同じような趣旨のカラオケ会【懐メロ会】は、奇数月に開催しております。
あなたも是非、カラオケ愛好会に入会して、歌の仲間になりませんか？

（S51 経）　　松永克樹

【最近の活動報告】

第 66 回	平成 30 年４月１日	参加者 11 名
第 67 回	平成 30 年６月３日	参加者８名
第 68 回	平成 30 年８月 12 日	参加者８名
第 69 回	平成 30 年 10 月 28 日	参加者９名
第 70 回	平成 30 年 12 月 29 日	参加者 18 名
第 71 回	平成 31 年２月３日	参加者 10 名

史跡散策会

第５回史跡散策会（平成 30 年 11 月 17 日）
【トロッコ列車で行く渡良瀬渓谷と足尾銅山跡】
今回もまた少し足を延ばして東武鉄道の特急に乗り、「銅山のまち」として栄え閉山となった今も当時の遺構が随所に残っている鉱都・足尾を訪ねました。
参加者：15 名　（反省会参加者は 14 名）
当日の行程：浅草駅 ―(東武特急「りょうもう５号」) → 相老駅 ―（わ鐵）→ 大間々駅 ―（わ鐵ﾄﾛｯｺ列車・車中で昼食）→ 通洞駅 → 足尾歴史館 → 通洞

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

坑 → 古河掛水倶楽部・
掛水重役役宅 → 足尾駅 ―（わ鐵トロッコ列車）→ 相老駅 ―（りょうもう 40 号）→
浅草駅 →【反省会】ビアレストラン「フラムドール」
前回同様、浅草駅朝８時 40 分発の特急「りょうもう号」に乗車。発車するや否やレピーターの多い参加者は前回学習した教訓？により早速持ち込みのアルコール類の栓を開けて宴会。約２時間後、相老駅に到着。ここで“わたらせ渓谷鉄道”に乗換え、２つ目の大間々駅からトロッコ列車「トロッコわたらせ渓谷３号」に乗車。列車は窓ガラスのない開放的な車内で、右側眼下に紅葉に染まる渡良瀬渓谷を眺めながらゆっくりと進んでゆく。車内では事前に予約して大間々駅で積み込んだ昼食用の弁当が配られてまた宴会！約１時間半程で通洞駅に到着。
通洞駅からいよいよ一つ先の足尾駅までの約３キロ、銅山の町として栄え当時の面影の残る町並みの散策の始まりだ。まず通洞駅からすぐの足尾歴史館へ。突然の来訪にも関わらず名物館長の熱烈歓迎を受け、足尾銅山の歴史と町の概要を学ぶ？。またここでは町が栄えていた頃物資や人を乗せて町中を走っていたガソリンカーと客車が動態保存されており体験乗車が楽しめる。構内の短い線路を２周するだけだが、一同子供に戻った気分で大盛り上がり。
名物館長とスタフに見送られて、約 10 分程歩いて足尾銅山観光（通洞抗）へ。ここでもトロッコに乗り坑道の中へ入り坑内を見学。資料館も見学してのち、足尾駅目指して約 30 分の散策（行軍？）だ。ここで問題が発覚。酒好きの参加者が多いため来るときに持参したアルコール類は通洞までの列車内で底をつき、このままでは帰りの列車内ではアルコール類なしという悲惨な状況になりかねない。銅山で栄えた頃と違い今は寂れて商店もほとんど見当たらず、通洞駅前に１軒しかない酒屋で調達して重い酒瓶類を持って 30 分歩くか否かの選択に迫られる。結局若手の協力もあり、その酒屋で日本酒の瓶入りと缶ビールを調達して足尾駅方面に歩き出す。途中、右手には時折渡良瀬渓谷の絶景が見渡せるのだが重い荷物を持った輩には絶景を楽しむ余裕もなかったかも知れない。それでも漸く足尾駅に辿り着き、駅前の古河掛水倶楽部（当時の古河鉱業の迎賓館）と重役役宅を見学して、当時の上級社員の暮らしぶりを垣間見ることができた。
復路は足尾駅から再びトロッコ列車（「トロッコわっしー６号」）に乗り相老へ。相老駅で特急「りょうもう号」に乗換え 18 時 55 分浅草駅に到着。重たい思いをして運んだ甲斐もあり、トロッコ列車＆特急列車の車内で味わうビールと酒は格別であった。

〆は浅草駅前のアサヒビール本社ビル隣のビアレストランで反省会。散策会では珍しく、ビールとワイン主体の料理に舌鼓をうった。今回は最初から最後までアルコール類を如何に調達するかが幹事泣かせであったが、なんとか参加者から苦情がでない手配ができてヤレヤレだ！

（S４５工） 萩原隆一

三田会サロン

「第２９回佐倉三田会ワンコイン・サロン」の報告
２０１９年３月３０日（土）に志津公民館２１０号室に於いて、当会会員の萩原隆一氏（S45 年卒）を講師に迎え「麻賀多神社の謎に迫る」という演題で話をしていただきました。今回も３０名の会員が参加しました。

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

まず自己紹介で、萩原さんが長年師と仰いだ元印旛郡文化財センター長の故高橋先生との出会いと、先生の影響で佐倉の郷土史に興味を持ち市内の史跡をあちこち探索することに至った経緯の説明がありました。その経験が当会の“史跡散策会”の企画にも活かされていると思います。
本題では麻賀多神社の謎として、①麻賀多神社は印旛沼の南にしかない　②何故１８社なのか　③名前の由来は？　をあげ、文献や資料で調べた結果に基づいて第１章から第４章に分けて説明。

第１章では、「印旛沼と四神社圏」についての説明の中で麻賀多神社の分布状況を、第２章では「麻賀多神社誕生」について歴史的観点からの説明を、そして休憩を挟んで第３章では３人の仲間と麻賀多神社の本社およびその他１７社を全部自分達の足で探しあて其々の麻賀多神社の祭神、神紋・社紋、神額、狛犬、鳥居，燈籠、御神木に至るまで現地調査をしてまとめ上げた「麻賀多神社の調査結果」の報告、第４章では「麻賀多神社誕生に至る迄の考察」として麻賀多神社創建に関与した多氏一族の祖先が印旛沼に辿り着くまでの話がありました。
とくに歴史的な話では、印旛地方はAD2Cに日本武尊が印波国で戦勝祈念したとか、AD3Cに伊都許利命によって麻賀多神社が創建されたとか、物部氏が旧弥冨村で麻栽培・麻織物を造ったとか、古来勾玉は朝廷の宝物の一つで有るがそれを名前に由来（当初、麻賀多神社は麻賀多真大神と称した）したのでは恐れ多いのでAD１０Cに現在の名前に改名したという。
また、第４章では忌部氏と言う祈祷を担う氏族が良質の大麻の適地を求め阿波国から海を渡って安房に上陸して房総の地に麻の種を蒔いたと伝えられ、其の「麻」の名前を使って麻賀多神社になったと考えられる。
等々興味ある２時間の説明後、質問も５～６人から出され講師との間で質疑応答が行われました。終了後、徒歩２分の場所にある「庄や志津南口店」にて懇親会を開催し２５人の方が参加しました。懇親会では獺祭が１升瓶３本、お店の好意で提供され賑やかに幕を閉じました。
尚、今回の講演会に参加できなかった歴史に造詣の深いＯＢの方より追加質問で「多氏と船橋大神宮の関係は？」などあり、メールにて講師より回答頂きました。
また、今回初めてパワーポイントを使用しての講演でしたが、そのやり方など当会会員で幹事の寺尾さんにお世話になりました。

（Ｓ４７経）　小林貞三

愛好会･サロン・史跡散策会参加申込先

ゴルフ愛好会　橋本政彦
Tel & Fax：043-461-6303
E-mail：fwi4695@mb.infoweb.ne.jp

囲碁愛好会　東海林忠生
Tel & Fax：090-9388-6275
Email：tajid-ohaos@catv296.ne.jp

麻雀愛好会　田中英二
TEL&FAX：090-2907-1580
Email：eijiandyumiko@docomo.ne.jp

カラオケ愛好会 天野一良
TEL&FAX：043-488-2250
Email：kazu.amano-2002@proof.ocn.ne.jp

史跡散策会　萩原隆一
TEL&FAX：043-461-9154
Email：tkk.hagiwara@orchjd.plala.or.jp

三田会サロン　小林貞三
TEL&FAX：043-461-7330
Email：xiaolin02787@yahoo.co.jp

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

特　別　寄　稿　①

蕎麦打ち　なまくら修行

2018 年９月 15 日に船橋三番瀬で行われた、全麺協が主催する「蕎麦打ち段位認定会」で初段位を認定された。これまで段位を取ろうとして熱心に練習してきたわけではなく、いきがかりで受験することになり、なんとか合格できただけだ。

蕎麦打ちを始めたきっかけだが、佐倉市の広報で紹介された蕎麦打ち体験会で地元の佐倉蕎麦の会を知り、2016 年１月に入会。月２回の例会では、始めの３ヶ月は指導料を払って指導を受けた。

ほとんどの会員は 10 年以上の経験を持つベテランなので、私が一人で打っていると、回りから口と手がどんどん出てくる。厳しい指摘のあとで、こうするんだと実演がはじまり、私にも早くやらせて欲しいと思うほど。なにしろ私は家内から「てぼっこ」（北海道弁で不器用のこと）とよく言われていたくらいなので、なかなか上手にならない。

たまに家でも食卓の上に延し台を載せて打っていたが、そのうち食卓がギシギシいいだして、これはやばい、専用の台が必要と思い出した。そこで会の重鎮にお願いしてパイプ式の組み立てスタンドを調達。ここまでくるともう後戻りはできない。

腕の方はなかなか上達しないが、自分で打った蕎麦はとても美味しい。家内が美味しいと言ってくれただけでなく、北海道の友人やご近所の知人に差し上げて喜ばれた。ただし人様に差し上げるときは、家内の品質チェックが入ったものだ。なぜなら切り終わった蕎麦には、ソーメンのような細いものと、きし麺のような「ぶっとい」ものが混ざっているのだから。

蕎麦打ちには水回し、こね、のし、切りのステップがあるが、私の最も苦手とするのが切りである。蕎麦道具は知人から譲っていただいたものを使っていたが、包丁を変えればもっと上手に切れるはずと思い込み、今年に入って合羽橋まででかけ、包丁専門店で大枚をはたいてヤスキ鋼の包丁を購入。しかし私の場合は「弘法筆を選ばず」の逆で、どんなに良い道具を使っても、なかなか満足のいく切れになっていないのが現状だ。さて、そんななまくらがなぜ段位試験を受けることになったか。８月１日に蕎麦の会の暑気払いが催されたが、その席で初段を受験するようにプレッシャーがかかった。それまでも何人かのベテランから勧められてきたのだが、美味しい蕎麦が打てて、喜ばれればそれでよし、という考えなので、いつも受け流してきた。しかしやはりお仲間に入れてもらうには、段位を取らねば、と思い直した。とはいえ試験日まで１ヶ月半しかない。そこで長老で優れた指導者である桜井さんの道場に通い、特訓を受けることになった。段位試験に合格するには全麺協が定めたルールに従わねばならない。私にとって一番の障害は、加水する水の計量から、最後の後片付けまでを 40 分で終えなければならないということだ。普段の私は切りまでに１時間位かけている。どこで時間を短縮するのかが問題だ。さらに後片付けについても、使い終わった道具の置く位置や清掃の仕方まで細かいルールが決められている。受験までの１ヶ月半で桜井道場に合計６回通い、桜井さんの的確で熱心な特訓を受けた。何とか 40 分で仕上げるところまでいったが、残念なことにその蕎麦はあまり美味しくない。もう少し時間をかけて「水回し」と「こね」を行えばおいしくなるのに、時間制限で手抜きをしなければならないのだ。練習で打った蕎麦は捨てるにはもったいないので、知人に食べていただいたが、ぼろぼろ切れてしまったという評価や、さらに時間内に治めようとあせって切るため、いつもの蕎麦よりも太かったと言われるなど不評続きだった。認定会当日に参加した 50 人の受験者は、５組に分かれて与えられた蕎麦粉を打つ。それを５人の審査員がぐるぐる回りながら審査する。最終的には 45 名が合格し、５ 人が不合格だった。段位認定証をもらったが、次は２段への挑戦というプレッシャーが出てくるのは間違いない。しかし私はそれにはもう乗らないことに決めている。私にとって蕎麦打ちは、食べていただく方を思い浮かべ、心を込めて打つものだ。そのことを改めて実感した体験であった。

（S４０商）　　岡村　亮

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

特 別 寄 稿 ②

小 説【 郷 愁 の 唐 津 】

松 永 克 樹（S51 経）

第 一 章

「唐津くんちから松浦佐用姫へ」ー私の舞台再訪ー

毎年、十一月が近くなると、唐津くんちのお囃子が、どこからともなく流れて来る。遠い唐津の地から千キロ以上も離れた佐倉まで時空を超えて私の心に何かを訴えてくるのだ。その正体が、朧気ながら、古稀を前にした私に、ようやく見えて来た。

今、私は半世紀振りに再訪した「鏡山」の頂上に立っている。眼下には、巨大な弓のようにしなって、唐津湾岸に沿って東西四キロ余り、青々とした松原が拡がっていた。あの「虹の松原」だ。

「虹の松原」の向こうには、果てしなく広がる群青色の唐津湾、玄界灘・・・。

故郷の舞台に再び立ってみると、遥か古代から連綿と続く唐津・松浦の魅力に圧倒される。

これほどスケールの大きい唐津・松浦地方の大自然のもとで、私達は青春の真っただ中を、力の限り走り抜けて行った。

十一月二日、十四台の色とりどりの曳山（やま）を引く唐津っ子達が、江戸時代から伝わる絶妙な調子に乗って、笛や太鼓、鐘を威勢よく鳴らし始める。

このお囃子は「あー、えんや、えんや、えんや！」と、唐津っ子の気質に似ていて、実に歯切れがいい。このお囃子に誘われ、二十万人を超える見物人が沿道にぎっしり並ぶ。唐津の街中を、威勢のいい若い衆・曳子に担がれた曳山が一斉にスピードを上げ始めた。

このシーンは、いつも見る者を圧倒する。台車だけでも１トンはありそうな曳山が、十四台、狭い唐津の城下町を走り回る。重さ数トンもある十四台の曳山は、唐津の街中のメイン・ストリートを、右に左にその巨体を揺らしながら、荒々しく走り回り、時折、砂塵が舞い上がる。

法被に鉢巻、黒の肉襦袢という「町火消し」のいでたちで、鍛え上げた鋼鉄のような肉体を包み、惜しむことなく力を振り絞り、自分達が生まれ育った町内の誇りである「曳山」を、力の限り、縦横無尽に操って、唐津の街を猛スピードで駆け抜ける。

赤銅色の肉体からは、汗が滴り落ちる。ここに唐津くんちの原点が詰まっている。

曳山が通るメイン・ストリートの店先からは、お囃子に乗って若女将達が駆け寄って来る。若女将達は、手桶から今にも溢れそうな力水を、若い衆の頭から、勢いよく何杯もかける。水しぶきがはねる。そして、若い衆の体からは、真っ白い湯気が噴出する。

唐津には、今でも「刀町」や「呉服町」「魚屋町」「坊主町」という、江戸時代からずっと、その情景が変わらない通りがいくつも残っている。「刀町」を歩いていると、威勢のいい祭囃子が耳に飛び込んできた。

「あー、えんや、えんや、えんや！」

真っ赤な鯛の形をした曳山が、頭から尻尾にかけて、シーソーのように上下に大きく揺れながら、いきなり私の目の中に飛び込んできた。

そこへ、一番曳山（いちばんやま）の「赤獅子」が姿を現しそうな情報が流れてきた。そうなると、刀町を支配していた赤鯛と赤獅子の激突の場面が拝めるのかも知れない。大きな勝負になるのではないか？それとも、もっと手ごわい曳山が出て来るのか？いったい、この勝負、どう決着がつくのか。刀町の家並みが、騒然となってきた。

一方、唐津の中心街の大手町に繋がる大通りを、真っ赤な巨体の赤獅子が、若い衆に引かれて、唐津神社のすぐ前まで突進してきた。まるで全身から赤い炎

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

を噴き出す怪獣の様にみえた。神社の前庭では粉塵が舞い上がっている。全部で十四台の曳山が、戦車のように大音響を轟かしながら、唐津の中心街に設置された広場に集結してきた。

こうして、曳山がすべて出揃う頃、唐津くんちは大きなヤマ場を迎える。大通りの両側には、幾重にも人垣ができた。最前列、かぶりつきの席を取るため、あちこちで小競り合いが始まった。

若衆は、檜の升になみなみと注がれた酒を何杯も煽っては自分の体に鋭気をつけ、威勢のいい掛け声とともに、重量級の曳山を引っ張り出す。

唐津の街中に祭囃子が鳴り響く。「あー、えんや、えんや、えんや！」

血の気の多い若者が、一団となって風を切って大通りを進む。格好の喧嘩の相手を探しているのだ。野次馬がどんどん増えてきた。他人の喧嘩を見るのは血が騒ぐからだ。

私は当時、まだ四、五歳だったので、人垣の間になかなか割り込めなかった。やっとのことで、人垣から抜け出すと、そこには、綺麗な芸者さん達が何人もいて、面喰った。白粉の匂いを嗅ぐと、子供ながらも、天にも昇るようないい気分になった。

あの時の、胸がときめいた感覚は、六十五年経った今でも、鮮明に記憶に残っている。

ふと我に返り、後ろを振り返った。兄ちゃんの顔が見たくなった。しかし、どういうわけか、祭りの間中、ずっと一緒だった兄が、姿を消していた。

「あんちゃーん」

何度も大きい声で兄の名を叫んだが、応答はなく、私は独りぼっちになった。

私に出来ることはと言えば、細い道路が迷路のように入り組んだ唐津の街を、兄を探して、ひたすら歩き回るだけだった。私はひどい方向音痴のため、誰かに道を聞いても、再び、同じ場所に戻ってしまう。

何時間も歩き回ったため、足が棒のように固くなり、痛みが走る。心細さが身に染みた。次第に空腹になり腹が痛くなった。コップ一杯のサイダーも飲めない。情けなくなり、涙がひとりでに、こぼれてきた。

「あんた、迷子じゃなかとね？」

赤ちゃんをおんぶし、両腕に二人の子を連れて曳山の後を追って来た若い母親が、私に気が付き、声を掛けてきた。

「お父さんとお母さんは？兄ちゃんとか、姉ちゃんは？どぎゃんしよらすとね？家はどこね？なんも、わからんとね？」

私は黙って頷くだけだった。ひどい空腹だったので、声を出す気力もなかった。

間もなく、その母親は私の目の前から去って行った。その後も、誰も助けには来てくれなかった。次第に薄暗くなって来た。私は、ただ、とぼとぼと、当てもなく曳山の後について行くしかなかった。

真っ赤な鯛の曳山を引く曳子達が身に着けているのは、「町火消し装束姿」だ。曳子の分厚い胸板が垣間見える、足元までの長く黒い肉襦袢に、町内ごとに異なる鉢巻と法被。江戸時代から引き継がれる唐津の町火消しのいでたちだ。唐津くんちの喧嘩は、江戸の喧嘩に引けをとらないという。酒に酔って曳山を引けば、海の男だ、誰だって熱くなる。

唐津市内の沿道の両側にぎゅうぎゅう詰めになった見物客が吐く息が白い。

曳山を引いて走り回る曳子達の体から吹き出てくる汗の匂いが鼻を衝く。

こうして、十一月二日から、三日間、唐津は燃え上がり、そして燃え尽きる。日本だけでなく、世界中から集まって来る、祭り好きの大勢の見物客。

祭りが終わると、あっという間に唐津の街は灯が消えたようになる。

「また来年の十一月に来るけんね。くんちには絶対、駆けつけて来るけんね！そいまで、待っといてね！絶対よ」

「おう！おいは、あんたば、ずっと待っとるけん。よかよ。北海道に帰ったら、おいのこと、

毎日のごて、思い出さな、いかんとよ！」

若いふたりは、松浦川に架る橋の上で別れを惜しんでいた。ふたりは手を取り合い、いつまでもお互いの

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

顔を見つめ合っていた。

遠くに鏡山がうっすらと浮かんでいる。松浦川は静かに流れている。

九州と北海道。二人の間には、二千キロにも及ぶ大自然が横たわっていた。そう簡単には超えられる距離ではない。だからこそ、くんちの三日間だけは、ふたりは激しく熱く、燃え上がるのかも知れない。若い二人は、曳山を見ようと、松浦川を渡り、市内の繁華街に出てきた。

松浦佐用姫と大伴狭手彦尊（おおとものさでひこのみこと）の間に横たわる大海原のように、乗り越えなければならないものが大きければ大きいほど、ふたりは、熱く燃えるのだ。太陽が沈み始める頃、曳山・宵山が、賑やかな祭囃子と共に、この若いカップルに迫って来た。

江戸時代から連綿と続くこの唐津くんちは、玄界灘のように、元来、激しく、勇壮な海の男たちの祭りだった。ひと昔前は、曳山の曳子同志が喧嘩になり、数人の死者が出たという。

唐津くんちの様々な情景を脳裏に思い起こすたび、私の唐津への郷愁は募るばかりだった。まるで、故郷が私を手招きしているかのようだった。

私は、ここ十五年の間に、腸閉塞、敗血症、脳梗塞と、三度も死に至る病に罹り、その度に、大学病院に搬送された。

敗血症で入院していたある夜、身の毛もよだつような夢をみた。霊界をさ迷っている多くの魂が、柩の中の私を地獄へ引きずり降ろそうと、必死になって私の足にしがみ付いてくるのだ。夢の中の私は、柩を足で蹴って抵抗したが・・・。

当時の私は体力がほとんどなく、唐津へ旅に出ることさえ、出来なくなっていた。

骨と皮だけになってしまった体を少しづつ鍛え直し、筋肉をつけ、いつの日か、独力で唐津の街を再訪する。この夢を実現するには、気の遠くなるような時間が必要だった。

わずか三日間でもいい、とにかく、くんちで燃え上がる唐津の街を、大地を、この足でしっかりと踏みしめたい。あの「刀町」の真っ赤な鯛の曳山を、至近距離で、この目で見たい。しかし、今となっては、すべてが遠い夢になってしまった。

だが、私は、たとえ、車いすに括りつけられてでもいい。とにかく、佐倉を出て千キロ先の唐津にたどり着きたい。その思いは、日を重ねるたびに熱くなっていった。

大学病院を退院し、久しぶりに帰った我が家の庭に、色とりどりの薔薇が咲き乱れていた。高空を飛ぶ旅客機の微かなエンジン音が、遠くから耳に届いた。

私が度々入院した病院は、成田空港に近かった。私の視線の先には、青空にぽっかりと浮かんでいるように見える銀色に輝くジェット機と、クロスした細く長い二本の飛行機雲があった。

「ほら、見上げてごらん、仲のいい飛行機雲よ。大空で上手にクロスしてるわ。きっと、これからは、いいことがあるという、お知らせだと思うわ」

妻は、タクシーに乗るため、杖を不器用に使いながら、車椅子から必死で立ち上がる私の手を、強く握りしめた。

それから、毎日のように、きついリハビリが始まった。そうして、三年が過ぎた。目の前の道路も、一人では一歩も歩けなかった私は、奇跡的に回復し、少しづつ日常生活の感覚を取り戻すようになった。

家族に手伝ってもらって、歯を食いしばりながら、近くのリハビリテーション・センターに通い続けたのが、結果的に良かったのだろう。私は、ひたすら、その日が来るのを待った。

そんなある日、この願望がついに叶う日がやって来た。母校を卒業後、半世紀が経った頃、かつての旧友達から招待状が届いたのだ。

「　『卒業五十周年記念同窓会兼古稀の会』を左記のとおり開催いたします。恐らく、これが皆さんと話し合える最後の機会になると思いますゆえ、どうか、万難を排して、ご出席ください」

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

　この招待状を読み終わった時、私は決意した。
「そうだ、思い切って、唐津へ帰ろう！この機会を逃したら、もう二度と故郷を見ることは出来ない。
這ってでも唐津へ帰ろう！」
　私の目から、はらはらと大粒の涙があふれてきた。母校で心を許した旧友のうち、既に亡くなった者が何人もいた。中でも、小、中、高と十二年間も一緒だった旧友の死は、悲しみを通り過ぎて、言葉にもならなかった。
　この同窓会に半世紀ぶりに出席し、旧友と会う度に気分が高揚していた私。こんなところで、思いもよらない事実に遭遇するとは、夢にも思わなかった･･･。
　平成三十年、十一月。唐津くんちが終わり、むんむんとした街の熱気は引き潮のように引いて行った。
　「虹の松原」の中に聳える唐津市の高層ホテルで開かれた、「『卒業五十周年記念同窓会兼古稀の会』の席上で、私は、高校三年の時の憧れのマドンナだった彼女の死を知った。
　「え？彼女が死んだって？」
隣の席に並んでいた親友から、ふっと耳にしたマドンナの訃報。私は急に気が抜けてしまった。
（私は、千キロも離れている佐倉から君に会いに来た。それなのに・・・。）
　立ち上がろうとして、目の前が真っ暗になった。慌てて、右隣に座していた女性の和服の袖に摑まろうとして、バランスを崩し、床の上にどうっと倒れた。腰を強く打ったために、しばらく立ち上がれなかった。和服の旧友は悲鳴を上げた。
　楽しいはずの同窓会は、亡くなった旧友達の鎮魂の会となり、重く、息の詰まるような時間がホテルの会場をゆっくりと流れて行った。
　恥ずかしさのあまり、会場から逃げ出そうとする私を見て、そっと白いハンカチを出す旧友がいた。
（そうだったのか。君は、あのマドンナを、それほどまでに好きだったのか。知らなかったなあ。
すると、君はマドンナを五十年も思い続けていたということか？本当に馬鹿なやつだなあ）
　親友は、途中で私を捉え、席まで連れて行った。

　佐倉の自宅に帰っても、彼女の十八歳の頃の笑顔が頭の中をよぎり、何も手につかなくなった。
私は年甲斐もなく、眠れない日々が続いた。
　高校卒業後、五十年間も彼女のことを想い続けて来たことは、内心とても気恥ずかしく、いまだに誰にも言えない。
結局、彼女は、あの時の十八歳のままで、私の心の中に生き続けることになるのだろう。
恐らく永遠に。
それでよかったのかも知れない。
すべては、半世紀も前のことだ。
　あの頃の私達は飛び切り若くて、純粋で、そして純情だった。お互いに手も触れなかったが、熱い情熱に燃えていた。彼女は、精神科医を目指し、毎晩、眠るのも惜しんで猛烈に勉強していた。私はと言えば、三島由紀夫のような作家になりたかった。小説を書いて、それを映画化するのが夢だった。
　私達は、よく虹の松原を散策しながら、それぞれの途を、希望を、よく語り合った。
その頃が、一番幸せだったのかも知れない。
　私達は鏡山に登って、唐津湾や玄界灘を見つめながら、日本や世界のことなど語り合った。ひょっとしたら、私は、あのマドンナと来世で再び逢えるのかもしれない。もし逢えるのなら、彼女に聞きたい。
「何故、君は、自ら生命を絶ってしまったのだ？しかも、私達の聖地だったこの鏡山から
飛び降りて。まさか佐用姫のように大空へ飛翔して行けると、君は思っていたのか？」
　当時の私達のこの熱い情熱は、あの伝説の姫、松浦佐用姫の熱い情熱に限りなく近いように思える。

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

五三七年、新羅に出征するため、帝の命を受け、この地、松浦地方に赴任してきた若者がいた。
若者の名は、大伴狭手彦尊（おおとものさでひこのみこと）。
尊は、松浦佐用姫と唐津の東の浜で、偶然、出会い、そして、ふたりは間もなく激しい恋に落ちてしまう。

唐津の海は、しばらくの間、静かにふたりを見守っていた。ひとたび荒れると、手の付けられない唐津の海が、まるで鏡のように凪いでいた。しかし、ひと月も経たぬ頃、ついに二人に別離の時が来た。

帝から、尊に、朝鮮の新羅国への出征の命が、下ったのだ。尊が朝鮮へ出発する数日前のことだった。
鮮やかな朱の陣羽織に身を包んだ若武者が、唐津の港に立ち、玄界灘に沈む夕日をずっと見つめていた。
若き将軍、大伴狭手彦尊の雄姿だった。
大伴狭手彦尊本人も、これほど早く、隣の朝鮮の国、新羅へ出征するとは夢にも思わなかった。
佐用姫は、そっと松林の陰から、尊の姿を見守ってい た。
今の尊には、とても寄り付けない。そんな将軍の風格と鋭い気合が、佐用姫を尊から遠ざける要因になった。

ある月夜の晩、唐津の東の浜で、佐用姫は尊に打ち明けられた。
「佐用姫よ、許せ。今宵限りじゃ。明日の早朝、戦のため、唐津から朝鮮に渡る。
命を落とすやもしれぬ。じゃが、これも帝からの命じゃ。どうにもならぬ。」

みるみる松浦佐用姫の顔が青ざめていった。
尊との、あの火の出るような熱い逢瀬の日々。楽しかった唐津の情景が浮かんできて、佐用姫の瞳から、思わず、大粒の涙が溢れ出てきた。尊は、作用姫を抱きしめたが、姫は涙を流しながら、尊から離れて去って行った。それから、しばらく佐用姫は尊の前から姿を消したままだった。

姫が唐津の港に現れた時は、大和軍の軍船は朝鮮に向けて既に錨をあげ、出帆する寸前だった。
その時、尊は、己が率いる大和軍の旗艦の舳先に屹立していた。尊の顔にも、ひと筋の涙が頬を伝ってい た。唐津の街をいとおしく振り返っていた尊の目に、港の岸壁で領巾（ひれ）を振っている佐用姫の姿が映 った。

将軍となった尊は、（佐用姫のために）、唐津の港を出帆する時刻を遅らせるよう、部下に命じた。

佐用姫は、かつて二人で遊んだ鏡山に向かって、走り出した。鏡山の背後から、朝日が輝く光を少しづつ広げてくる。そうして、煌めく朝日の中を、佐用姫は懸命に走った。

悠然と流れる松浦川の橋を渡り、虹の松原に入った姫は、松の木立から漏れてくる朝日を浴びながら、懸命に走り続けた。そして、姫は、鏡山の麓に辿り付いた。手足に数えきれないほどの傷を負いながら、佐用姫はついに鏡山の山頂に立った。

そうして、作用姫は、唐津港に停泊していた旗艦が、岸壁をゆっくり離れて行く様を見た。
尊は、旗艦の舳先に立ち、佐用姫に気が付き、手を振っていた。

鏡山の頂で、領巾（ひれ）を大きく振りながら、佐用姫は愛する尊の名を呼んだ。
しかし、その名は、折からの強い海風にかき消され、尊の耳には届かなかった。

佐用姫の眼下には、唐津湾を離れ、玄界灘に向かう大和軍の軍船団が波を切って、朝鮮海峡へ向けて進んでいた。作用姫は、鏡山の頂に佇んだまま、号泣した。
「尊は、必ずや、朝鮮半島で見事武勲を挙げ、無事大和へ凱旋なさることでしょう。
でも、もう、私は二度と逢うことは出来ない。尊は、私の手の届かぬ遠い所へ行かれてしまったから・・・」
作用姫は、鏡山の頂から玄界灘を見降ろしながら、尊のことを想い続けた。

第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

そして、ふっと意を決した佐用姫は、鏡山の頂上から一気に飛び降りてしまった。

作用姫は即死して、ここで悲恋の物語は終わる。しかし、鏡山とその周辺には姫の遺骸は発見されなかった。姫は、鏡山から数十キロも離れた唐津市の加部島で息を引き取ったという説が、限りなく真相に近い。この話には信ぴょう性がある。

「松浦古事記」によると、天平三年（七三一年）、加部島の田島神社に、日本武尊の子、稚武王（わかたけおう）を相殿に配祀したという記述がある。

それを裏付けるのが、加部島の北部から発掘された古墳。それは、六世紀初頭の前方後円墳（瓢塚古墳）で、その内部からは、王とその配下が使用する須恵器、鉄器、玉類が発見された。

田島神社の境内社、佐輿姫神社（さよひめじんじゃ）に、作用姫そのものという石が祀られている。
私の想像では、佐用姫が鏡山の頂から飛び降りる前に、天地を揺るがすような強大な突風が吹き荒れた。地上や海上は言うに及ばず、強い大型の突風は、北九州全域を席捲した。

それは、千年に一度の超大型台風だった。
もし、そうであれば、超大型台風は、松の枝に引っ掛かっていた佐用姫を、松の木ごと雷雲に乗せて軽々と運んだという推理が成り立つ。唐津・松浦地方を襲った超大型台風は、鏡山の七合目辺りの松の枝に引っ掛かって命拾いをした作用姫を救い上げ、雲の上まで連れて行った。それは、まさに神がもたらした、「命拾いの神風」だった。

神風は、佐用姫の体をなんなく雲に乗せ、玄界灘の呼子と名護屋に挟まれた「加部島」の上空まで連れて行くと、島の平らな牧草地に、そっと降ろした。

やがて神風台風は去って行き、姫は息を吹き返す。
古来から神の島として崇められていた「加部島」。
加部島は、日本武尊の子、稚武王を相殿に配祀している由緒ある田島神社を擁していた。
いわゆる伝説の神の島であった。

つまり、佐用姫は、鏡山を飛び降りた瞬間、気を失った。そして、大空へ舞い上がり、その後、ゆっくりと舞い降りた。あたかも天女のように。
作用姫は、ひらりひらりと跳び続け、呼子と名護屋に挟まれた加部島に舞い降りた。

その頃、尊が乗った大和軍の船団は遥か彼方の朝鮮へ向けて力強く帆走していた。佐用姫は、最後の力を振り絞り、加部島の岬の突端までたどり着いた。
そして、その場所で、短い生涯を閉じた。

作用姫はそのまま白い石と化していった。石となった佐用姫は、海中深く消えて行き、やがて海底に沈んで帰らぬ人となった。

今もなお、唐津・松浦地方に残る、伝説の悲恋の姫、それが松浦佐用姫。

冷風に身も心も震える初秋、私は想いが叶って、松浦作用姫伝説で名高い鏡山の頂上に立つことが出来た。そして天を仰いだ。眼下には、夕陽を受けて黄金色に染まった稲穂の絨毯がどこまでも広がっていた。
その先には、豊かな水を湛えて悠然と唐津湾に向かって流れる母なる河松浦川が静かに横たわっていた。
松浦川の水面に夕陽がゆったりと影を落としている。
半世紀前に出会った彼女も、この松浦川を遥か遠くから見つめているのだろうか？

（続く）

第１７号 佐倉三田会だより

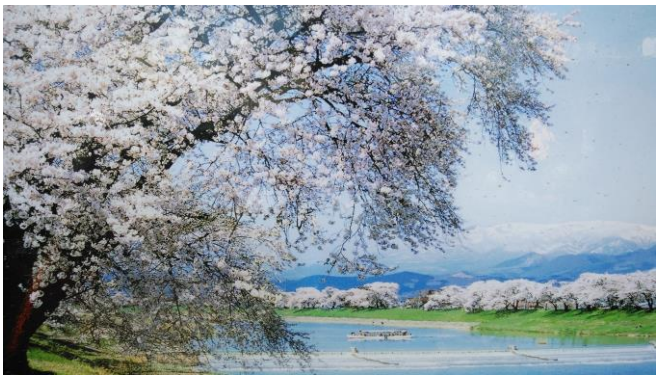
佐倉三田会事務局
２０１９年6月発行

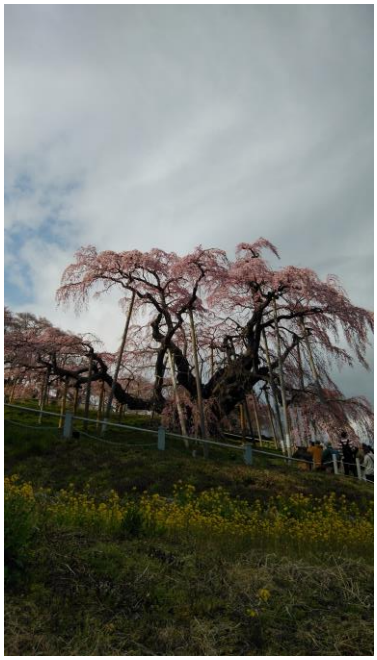
特　別　寄　稿　③

代表幹事の加藤準さんの東北桜紀行画像です。

４月中旬の東北（福島県、宮城県、山形県）に桜見物に行きました。
毎日晴天で雪山を背景に見事な桜でした。
東北の冬は寒く、春を待ち望み一斉に咲く桜はとても綺麗でした。

（S49 工）加藤 準





第１７号 佐倉三田会だより

佐倉三田会事務局
２０１９年６月発行

佐倉三田会　平成30年度会計報告

第2号議案

（30年4月1日～31年3月31日）

収入の部　　単位：円

項　目	予算	決算	備　考
前年度繰越金	549,944	549,944	前年度比63,760増
年会費	300,000	282,000	3,000×94名＝276,000　前年度比2名増
総会懇親会費	500,000	477,000	祝い金含む　参加54名+来賓13名
ﾌｧﾐﾘｰﾊﾟｰﾃｨ会費	350,000	334,000	参加51名
雑収入	60,000	144,805	連合三田会大会券販売　40,000　利息5
			寄付金　104,800
			（カラオケ12,100円、提供品販売84,700(写真3点含む）ほか）
収入計	1,759,944	1,787,749	

支出の部

項　目	予算	決算	備　考
総会懇親会費	460,000	426,300	ｳｲｼｭﾄﾝﾎﾃﾙ宴会費　377,660　ほか
ﾌｧﾐﾘｰﾊﾟｰﾃｨｰ宴会費	350,000	310,160	ｳｨｼｭﾄﾝﾎﾃﾙ宴会費　308,160　ほか
渉外費	230,000	185,000	千葉県合同三田会　15,000　千葉・市川三田会各10,000
			船橋・四街道・八千代・浦安三田会 各20,000
			佐倉稲門会　20,000　連合三田会大会券購入　50,000
会議費	19,000	14,665	幹事会　4/22・5/27・6/17・7/29・9/30・10/29・11/25・
			1/27・2/24・3/31
事務費・通信費	60,000	31,495	インク代21,149　ほか
その他　予備費	91,000	71,371	総会等謝礼　50,000
			早慶合同講演会17,145（稲門会主催）ほか
（　小　計　）	1,210,000	1,038,991	
次年度繰越金	549,944	748,758	
支出計	1,759,944	1,787,749	

本年度の会計収支について、関係帳簿ならびに関係書類を詳細かつ慎重に監査したところ、いずれも適正かつ正確に処理されていることを確認しましたのでご報告いたします。

平成31年4月30日　　監査　岩渕　明弘